

介護の中の愛語

島根県 観音寺 徒弟 藤原玄光

私は、曹洞宗大本山總持寺での修行を終えた後、島根に帰ってききましたが、「社会経験を積みたい」と思い就職することになりました。そして介護福祉士の資格を取り、地元の特別養護老人ホームで五年間働きました。

介護福祉士として働く上で重要なのは、介護を受ける方とのコミュニケーション、「声掛け」であると教えられます。学校ではもちろん、働き始めてからも、定期的に「声掛け」に関する研修が行われていました。研修では、声掛けの声の大きさやトーン、声掛けする時の距離や高さ、表情や動作に至るまで指導されます。また介助をする時は、一つ動作をする前に一つ声掛けをする、「一動作、一声掛け」が基本だと習います。

何故、ここまで声掛けが重要視されるのかと言えば、どのような介助をするにしても、介護を受ける方の協力が必要不可欠だからです。例えば食事の介助をするには、まず口を開けてもらわなければ始まりません。しかし何も言わず食べ物だけを差し出したのでは、誰でも警戒して口を閉じてしまいます。

ですから、まずは声掛けから始め、こちらを信頼してもらわなければな

りません。しかし身体機能の衰えや、認知症などの影響で、普通に話しかけたのでは伝わりにくい方もいらっしゃいます。そのため、介助者は、きちんと伝わる「声掛けの技術」を学ぶ必要があるのです。

一方で実際の介護現場は、人手不足の影響もあり非常に忙しいものです。私自身、常に時間に追い回されるように働いていましたし、他の職員も同様でした。そのような状況ですと、どうしても声掛けがなおざりになってしまいがちです。声掛けが不十分な時には、事故が起きたり、誰かが怪我をしたりする事もあります。また声掛け一つで、介護を受ける方が腹を立てられたり、穏やかになられたりといった事は何度もありました。

仏教には『愛語』という教えがあります。誰にでもできる、人々を救う行の一つとされていて、具体的には、相手のために、相手の事を思って、愛のある言葉をかける事とされています。働いていた頃はそこまで考える余裕がなかったのですが、介助の際の声掛けは、まさしく「愛語の実践」だったのだと、介護を経験した今では身をもって納得しています。